



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24
Tel: 046-871-1863 Fax: 046-872-3485

善知識との出会い

先月の奏庵法座には、私どもの恩師である、元アメリカ開教使、龍谷大学名誉教授、善宗寺住職中垣先生のご法話をいただきました。

先生から膵臓癌であるとお聞きしたのは四年前だったと記憶していますが、学会などで上京されるたびに当庵の百段近い階段を「法縁坂」だと楽しみながら上がってくださり仏縁を結んでいただいています。

その度に「声、よお出るやる。死ぬ前の元気やと思うねん」とおっしゃり、我々は「先生の死ぬ前の元気えらい長いなあ」とやり返し、その間には私も癌を経験して、お互いに「死ぬ死ぬ詐欺をやり続けよう」と励ましあったものですが、今回は「あなた方と今生の別れをしたい」との先生からの申し出でした。

今は痛み止めの点滴を受けるほどで、主治医の診立ては月単位とのこと、自分の葬式は、12月1日だと冗談めかして言っておられましたが、迎えに行った駅で見たお姿に現実であることを思われました。

しかし、ご法話には病気や苦痛の話題はなく、ただただ言い遺しておきたいご法義を、それこそ「死ぬ前の元気」を振り絞って語って下さいました。そして、滞在中は気がつけば深夜に及ぶまで話は尽きず、それは

お互いが多くの善知識を共通しており、ありがたい人生だったという思いで、語っても語っても尽きませんでした。

先生と私の善知識（法友）への思い出は、生まれて、生かされて、死んでゆく。この自然の法則は、我々の思惑に先行している誰にも平等にはたらく法則であって、この法則を納得することがお念仏のはたらきだと、それぞれのなりわいをみ教えとともに生きて下さった方々です。その姿を、なつかしく、楽しく、ありがたく、偲ぶことでした。その多くはお浄土に往かれ、「お浄土でまたいっぱい話さなければならぬから、元気な仏さんになって参らせてもらおう」と尽きぬ話を閉めたものです。

* * *

私の善知識には「苦勞」や「業績」を語る方はありません。ご苦勞下さり、仏徳を遺して下さったのは、ひとえに阿弥陀如来であり、そのことを自ら他力の教えに生きてお示し下さった親鸞聖人であり、それを繋げて下さったお念仏の仲間だと、共々に味わえる方々です。先生と私の善知識は、言うなれば、訳がわからぬままいろいろなもののおかげを蒙って生きて死んでゆく、それを有り難い、嬉しいと、よるこんで生き抜いて下さった方々です。

妙好人源七は、「弥陀は凡夫

のウブを受け取る。善知識は凡夫をウブにして渡すが役。私はただ凡夫の性のウブのまま死んでゆくじゃ」と詠みました。

このウブという表現は、信心の歩き出しから終着点までを実に簡潔に言い当てています。学問だけでは決して言えない言葉です。やはり生死（人生）の矛盾の解決に苦勞した実践者だからこそその言葉だと思えます。

またその苦勞は自分で語るものではなく人によって偲ばれてこそです。このウブは「ありのまま、そのまま」という意味で、甘えや開き直りではなく、念仏者の謙虚さであり、恥じらい、たしなみだと思えます。

心の準備だけではなく、物理的な準備も「そっと、人知れず」やるものではないでしょうか。

「終活」などと称して大見得をきってやるものではなく、ましてやお棺に入ってみるなど悪趣味としか思えません。

死が来たら死んでゆくというのは浅い意味ではなく尊い真理です。『いのちのありように気づくことがタスカル（救われる）こと』、それがいのちを終わっていく、安心して生き、安心して死んでゆくということです。先人たちが見せて下さったその姿を我々も示す、それが先ゆくもののはたらきであり、つとめではないかと思っています。

合掌

奏庵法座

日時

10月26日 (金)

午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

住職法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～＊～

おとぎ

秋らしい気候となつてまいりましたが、度重なる台風の塩害で木々が紅葉することなく冬模様なのは残念です。またこの季節にはカレンダーが薄くなることへの感傷を覚えますが、若い時はどうだったかと言えば、しかとは思い出せません。それだけ人間とは行き当たりばったりで、その時その時を乗り越えて生きてきたのでしょうか。それは愚かでもあり、逞しさでももあり、自然な生き方です。またひと踏ん張りです。どうぞ気をつけてお参りください。



仏教が生んだ日本語

【意地】

「意地」という言葉は、一般に自分の思うことを通そうとする心という意味に使われている。

「男（女）の意地」などという使われ方もあるが、だいたい「意地を張る」、あるいは「意地悪」など、どちらかと言えばあまり良くない意味に使われている。

「意地」はもともと仏教用語であり、人間の五官による認識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）の次にくる第六意識（心）のことで、人間の心とは、あらゆるものを生み出し、またおさめる無限の可能性を持っているものなのだ。

一方で残念ながら、人は人間関係において、どうしても自分中心にものを考えるものである。その心がいわゆる日常語の「意地」という感情を生み出し、自ら退き引かない状態をつくり背負うことになってしまう。

心が思い通りにならないということは、人間の歴史以来の大きな問題だ。釈尊はこの問題に真正面から取り組み、人生が思い通りにならないこと、すなわち「苦」の原理を発見した。

仏教は、まさに心の制御の道を教えるものである。人間は誰も絶えず自己を愛してやまない深層意識から、思い通りにならない心（意地）が生じ、それによって人生の様々なトラブルが発生していく。そのような心をコントロールする智慧を追求していくのが仏道である。今日意地によって様々なトラブルが起こっているが、実は意地という言葉そのものの奥に、自らの心の制御という解決の鍵が隠されているのである。

(大谷大学編参考)

編集後記

19日夜、二人目の孫が生まれた。エコー画像では女の子だと言われている、すっかりそのマインドで待っていたから、「今生まれたようだ」と知らせがあつても、昔ならまず聞いた「どっちだった？」と聞くことなど思いもよらず、無事出産を喜んでいるところに二度目の連絡、生まれ出た子は男の子だった。■それはすぐには切り替えのきかないような不思議な感情だったが、「よかった、よかった」は心から無事な生命の誕生に対するものであり、生まれ出る前に性別を知るということの意味の無いことを気づかせるものだった。■無事をありがたく味わうゆとりが出てテレビをつけると、ちょうど著名な産婦人科医の対談をやっていた。生まれることが叶わず自然流産する率は妊娠を自覚した8人に1人という高い率だと話しておられ、今更ながら「生命は授かりもの」という言葉のある意味を思う。胎児の状態を知ることができるという医学の発展は、それを生命への何らかの操作に結びつけないという覚悟のもとに成されていかなければならない。文明、科学、医療の進歩には、人間だけではなくあらゆる生命に対する侵してはならない厳粛さが求められる。■二人目も女の子と聞いて、生まれた順番に関係なくその人格において平等に育てようと話していた覚悟は、男子誕生でも何ら変らいという新たな覚悟に変わりつつある。平成時代が間もなく終わる。次の時代も苦難の方が多いだろう。見届けることができない孫たちの時代が、柔軟でしかも強く、寛容で自由な心で歩める時代であつてくれることを願うばかりだ。

Norimaru